愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第36巻　129～143　1990

健康教育試論

第1報　喜怒哀楽の教授法

山本　万喜雄
（保健体育科教室）

（平成元年10月11日受理）

目　次

第一章　健康の科学的認識の育成
1.　3つの観点
2.　健康づくり　10の提案
第二章　人間讃歌の健康教育めざして
1.　模索の日々
2.　山田洋次の映画づくり論に学ぶ
第三章　喜怒哀楽の教授法
1.　まきおの教授法
2.　授業のリトマス紙――学生の感想から
引用・参考文献

第一章　健康の科学的認識の育成

1.　3つの観点

教育は，本質的には学習者の意識を決定する機能をもつものであるから，健康教育はなによりもまず，学習者の健康への意識を育てることを任務としなければならない。

無数の人々の愛と労働によって手塩にかけて育てられた子どもたち。そのかけがえのない生命・健康がおびやかされている現代日本にあって，学習者の健康への意識を育てる任務はますます大きくなると思われる。現実の核心に迫ろうとするものは，何よりもまず与えられた現実から出発せねばならない。

科学的認識の育成をめざした健康の教育では，次の3つの観点が必要である。[1)]

第1に，原則的には健康は自らの実践でつくりあげるものである。したがって，子ども自身，人間のからだのしくみと働きとを結びつけて，生命と健康を守る意味と方法を学ばなければならない。その際，自己の尊厳の自覚から健康生活の自己統制への発展が重要になろう。

教育の根本を「人間の尊厳と自由」の自覚にあると考える門脇一生は，次のように指摘している。

「人間の尊厳の自覚は，自分の尊厳の自覚からはじまると思う。そして，いったん，自分が尊厳な存在であるという自覚――それは，私にいわせれば，人間が一面においてかぎりなく卑少な存在であるという自覚をともなうのだが――が生まれるなら，その自覚の程度に応じて，

そのひとつの現実の生活の革新を必然的にともなうものである。生活が新しくならないような『人間の尊厳の自覚』は存在しないと思う。自分の存在がかぎりなく尊いものであると知るなら，どうして自分を粗末にするような思いや言葉や行ないに身をまかせることができるだろう。自分の尊厳の自覚は，当然，他人の尊厳にたいする認識をともなうのであって，家庭生活や学校生活での人間関係も，この自覚の成長とあいまって，しだいに新しくされてゆくはずのものではないだろうか。」[2)]

第2に，過労死問題にみられるように，今日では健康は自らの努力だけで守り育てることができないものである。したがって，子どもたちは健康の権利と連帯性の観点から，いのちの守りあい・環境変革の発想を学ばなければならない。この観点が欠如すれば，子どもたちは健康と安全についての自己防衛の限界に気づくことなく，疾病の自己責任論に陥ってしまう。

人間らしく生きる権利を無視し，国の社会保障義務を免罪したらどうなるか。かつて中学保健体育教科書には，次のような記述があった。

「国民病の予防や治療には，国や地方自治体・民間団体などの力も必要であるが，さらにたいせつなことは，患者自身が，はやくなおすように努力し，他の人に感染させないようにすることである。

また，周囲の人々も，国民全体のしあわせのために，患者の治療に，あらゆる援助をおしんではならない。つまり国民全体の健康について，国民のひとりひとりが，責任をおうことが，国民病をなくす最大の力なのである。」[3)]

子どもたちは健康の社会科学的認識を獲得することによって，こうした自助努力・相互扶助論の一面性を批判することが可能になるであろう。

第3に，保健というのは，人間的な生き方の一環としてあるものである。Lebenということばには，「①生命　②生活，生，人生　③元気，活気，反乱，激動　④一生，生涯，伝記　⑤生計，暮らし，生活ぶり，行状　⑥現実，社会，世間，実物　⑦生物，被造物　⑧最も貴重なもの，愛人　⑨（動・植物の）活肉，（鉱物の）風化していない部分」[4)] という意味がある。つまり，生命・生活・人生は同じ一つのことばから生まれている。そのように考えれば，いのちの問題を考えることは暮らしのことに，暮らしの問題を考えることは政治的・経済的・社会的なことがらにつながっており，そのことで人間的な生き方という価値を問うことになる。平和・民主主義と健康観の形成とは，このようにして結合するのである。

丸山博の指摘にもあるように，「もともと，健康という状態は個人にとっては，独立・自由・平和の状況を意味します。」[5)] したがって，健康教育をすすめる際は，人間的な生き方ときり結んだ学習がなされる必要があろう。また，住井すゑがいみじくも定義づけたように「文化とは，生命を守ること」[6)] である。いのちとくらしと生き方とをきり結び，健康で文化的な生活を創りたい。

2．健康づくり　10の提案

前述の3つの観点を生かした健康づくりの10か条を挙げておこう。

① からだ・健康は，日々の生活の中でつくられるもの。これまでの家庭や地域・学校のなかでの生活で，からだづくりにとって意味のあった生活場面や内容をとりもどそう。

② 受け身の生活が多くなったために外界への働きかけの必然性がなくなった。生活のなかに「不自由さ」を意図的につくり出し，外界へ働きかける意欲をかきたてよう。

③ やる気が出るのは，めあてが出来そうなちょっと先にある時だ。なぜそのことをしなければ

いけないのか，意義をていねいに語り，少しだけ困難な課題（時には大胆な課題）に挑戦させ，達成のよろこびを経験させよう。

④ 五快――快食・快眠・快便・快動（働）・快笑――は健康のバロメーターである。一日のスタートは，まずさわやかな目覚めから。朝の生活を充実させ，大脳をしっかり目覚めさせよう。

⑤ 微症状の変化の発見には，いつもの様子，それも良好な状態をよく知っておくことがとても大切である。例えば，いつも正確に字を書く人が間違いはじめると，それは脳疲労の信号。自分のからだの良好な水準をよく知っておこう。

⑥ 空気や水，また寒さや暑さという四季の自然環境の力をおおいに利用して，環境の変化に強いからだづくりをしよう。

⑦ 健康づくりが生活に根づくには，持続性のあるもの，素人だけでやれるもの，よろこびが感じられるもの，科学的に裏付けのあるものが必要である。

⑧ 健康への関心は，書物を読むだけでは形成されない。生身の現実を真剣に生き，その中に問いを発見して，それの解決を自らの課題として引き受けるという姿勢が不可欠である。見つける，見つめる，見直す，見いだす，見渡す。この5つの「生活を見る」運動をおこそう。

⑨ 私のからだは私のもの。自らの努力で，健康を守り育てていかなければならない。と同時に，健康はみんなで守りあうもの。健康を失う危険性が充満している現代は，個人的努力だけでは守れない。新しい健康観を持とう。

⑩ W. H. O.（世界保健機関）の健康憲章がうたっているように，最高水準の健康を享有することは，すべての人間の基本的人権の一つである。「健康の権利」の実現には，要求なくして行動なし，行動なくして健康なし。各自がそれぞれ「緑の日」をつくって，生命をリフレッシュしよう。

第二章　人間讃歌の健康教育めざして

1. 模索の日々

「重厚長大の文化」から「軽薄短小の美学」へと変わる時代の風潮。情報の揮発度が高くなった現代において，めまぐるしく変化する刺激の連続にならされた若者は，ともすれば瞬間的な「おもしろさ」の量だけを唯一の価値と考え，笑いそのものがもっている質や内容への関心を失っていく傾向がみられる。また，脈絡にこだわろうとする人々を（時には自分までも含めて）「なあーんちゃって」という言葉にあらわれているように，まじめさを嘲笑し，茶化すような光景さえ見受けられる。

国民の感性調査をした電通の研究スタッフによると，現代人が強く求める情報価値とは，〈軽・我・華・鮮〉の4つの要素だという。つまり，「軽」はライトでナウな感覚，「我」は個性的・知性的な感覚，「華」はしゃれたリッチな感覚，「鮮」はヘルシーでフレッシュな感覚をさす。そこのＰＲ局長・藤岡和賀夫の唱えたキャンペーン「モーレツからビューティフルへ」のように，時代の状況が大きく変化しているにもかかわらず，労災・職業病とか公害といった重いテーマを引きずって「熱演」していた。そんな私を打ちのめしたのが，次の感想文である。

「あまりに知らなすぎるから，矛盾すら感じなかったことを知ることができた。怒りをまじえて。他から与えられ，自分も感じとった怒りなのに，すぐさめてしまう，〝自分さえよければ精神〟が全面にただよっている私。冷静な目で態度でこの授業がうけられていたら，もっと

あの感動と怒りは継続するのだったのに……。私の生活の中にまで浸透しなかった。」

この文章にみられるように多くの若者は，「軽」の世界に住みながらも，生身の現実を真剣に生き，その中に問いを発見して，それらの解決を自らの課題として引き受けようとしているのである。学んだことが生きて働くためにはどのような発想が必要なのか，方法はどうか。その模索の中でつかんだのが，山田洋次の映画づくりの発想であった。

健康と文化をしっかり結びつけながら，たのしさを軸に，健康な学生たちに健康の意義をていねいに語ろう。人間讃歌の健康教育めざして新しい出発である。

2．山田洋次の映画づくり論に学ぶ

(1) 山田洋次の世界

すぐれた芸術家の仕事は，授業づくりのヒントの宝石がちりばめられている。いつの頃からか，私の場合，山藤章二の「ブラック＝アングル」で心のアンテナの微調整を行い，映画監督・山田洋次の諸作品から授業論を創造するエネルギーを得ている。

山田洋次の世界とは何か。『作品集』[7]（全８巻）の解説から抜すいしてみたい。

① 山田洋次が処女作以来，いいつづけていることのたしかな一つは，人間が人間として生きるために失ってはならないものを守り抜くことこそ，本当に人間的であり，進歩と発展に価するものだという思想である。（山田和夫）

② 彼の作品の中にインテリが出て来ないのも，つまりは画一的な智識そのものに対する嫌悪がそうさせるのだろう。智識といって悪ければ画一的な認識，場当り的な限定の持つ〝いかがわしさ〟への拒否といってもいい。それが映画という〝いかがわしいもの〟を作る人間としての，核となっているように僕には思われる。（森崎東）

③ 知恵の限りをつくしたとき，なにか祈りにも似た気持がうまれると彼はいう。おもいがけぬあたらしい展望がひらけるのはそんな時なのだと彼が語ってくれたことがあるが，創造する喜びと楽しみは，そうした「塗炭の苦しみ」をとおりぬけて初めて得られる境地なのだろう。そばにいるのがつらいくらい深刻な顔つきでうつむいて考えこんでいた彼が，ふと顔をあげると，まるでそんな雰囲気とはうってかわった愉快なセリフを聞かせてくれ，自分でもアハハと笑う。そのときが山田作品を担当したプロデューサーのいちばんの喜びである。（脇田茂）

④ 山田作品に色濃く滲んでいるのは，人の心のやさしさではないでしょうか。過酷な現実の中で，生きてゆく人々への激励と拍手でしょう。しかし，それは単なるやさしさだけではありません。山田さんが「素材に対して強い衝動にかりたてられ，深い愛情をそそぎながら全力をこめて作る」時，例えば「家族」をみても，あの東京のシークエンスに迸(ほとばし)る怒り，そして動哭と，たまらない哀しみを誘うのは，作者の激しい情熱がそこに叩きつけられたからで，そこにはからずも，山田さん自身が全く意識されていなかった素晴しい「技術」が生まれていたのです。（島津清）

⑤ 山田監督のネバリは定評がある。粘る人必ずしも名監督とは言えないが，名監督と言われるほどの人は例外なく粘り屋だ，といってもいいだろう。新人監督の頃から，山田監督は既に充分にこの点で目立った。（高羽哲夫）

⑥ 山田さんの風景は，いつも控え目に，人間をつつんで沈黙しているように思えてならない。山田さんは，人間が好きで好きでならない人のようである。（松村達雄）

⑦ 山田監督の人間をみつめる眼は，きびしく，あたたかく，自己にもきびしい方ですが，私が

いつも思うのは脇役者を実に生き生きとうまく活かして下さることです。(太宰久雄)

⑧「他人を優しく思いやり，楽しく笑いながら，どこまでも前進しつづけて行こう」山田さんの作品にこめられた作者のメッセージを要約しようとすれば，こういう風にまとめられるのではないかと私は考える。(マイケル・リッチ)

⑨ 山田さんの作品はどちらかと言えば，ドラマチックな構成をとらないで，現実生活の中での身近な，人間の触れ合いのエピソードを積み重ねる方法が多い。(中略)山田さんが日常性の中でひとつの行為，ひとつのアクション，表情を凝視することから，それを一時間乃至二時間のドラマに拡大して，人生の哀しみや喜び，愚かしさや美しさを見つめようとする姿勢は，落語の持つ客観的リアリズムとある意味で一致すると思うのである。そこには単なる庶民派というより厳しい人生への心意気を感じるのである。(宮武昭夫)

これらのイメージを響きあわせると，どのような像が浮かぶであろうか。山田洋次の映画研究に打ちこむ高校教師，吉村英夫は，近著『新・男はつらいよの世界』の中で寅さん映画の人気の秘密を分析している[8]。

① 丁寧に作られた映画である。
② 病んだ文化・病んだ映像に対抗する向日的映像の典型として。
③ 偉大なる時代錯誤者寅の創造，それは文明批評になっている。
④ 落ちこぼれの名誉回復。
⑤ 自由への憧れの形象化と労働の意味の確認。
⑥ 中央に対しての地方の復権。
⑦ 真に日本的なものはインタナショナルな普遍に通ずるということ。
⑧ 新しい喜劇の誕生。
⑨『男はつらいよ』は，多様な評価が咲き乱れ論議の的になることによってファンを再生産していった。寅次郎をどのように理解するかは，期せずして日本の文化を考えるリトマス試験紙の役割をも果たしている。
⑩ つながりあえることのすばらしさ，そして人間賛歌としての『男はつらいよ』。人間がばらばらにされている時代の連帯の回復と人間賛歌。高度成長社会（および以後）を背景にした，憩いと慰めと励ましの人間復興のドラマ。

また，映画『幸福の黄色いハンカチ』の魅力について，石子順はこう指摘する。「①楽しい ②はらはらさせる ③熱中させる ④あとあとまで残る ⑤何回もくり返し見たくなり，そのたびに新発見する ⑥それを見る前と見たあとでは，何か人間や世の中に対する見方が変わったような気がする ⑦わかりやすいところから真理を訴える ⑧生きがいと感動をもたらす」と。

要するに，山田洋次の世界とは，人間讃歌の映画づくり，あるいは文化論と言えるだろう。

次に氏自身の著作から学ぶことにする。

(2) 映画づくりと授業づくり[9]

いま教育現場は，「偏差値が支配する能力主義や，教育活動における無駄のない注入と周到な行動統制と教育活動全般の事務労働化として出現する能率主義」(城丸章夫)が浸透し，子どもたちはS. O. S. の信号を発信している。しかし，人間らしい感覚を喪失させられた人には，このサインは届かない。

教師が人間的センスを失ったらどうなるか。一人の学生は，愛媛県内のある小学校で見た授業風景を次のように報告してくれた。3年前の話である。

「教育実習のおわりに公立学校訪問をしたのですが，O小学校の状態は異常でした。理科の授業で，ロウソクが燃えるときには酸素が必要だという実験をしていました。実験に使うおしょうゆの空パックを先生のところへうけとりにいった子たちは，一人ずつ，先生から両手で受けとって深々と礼をして帰ります。実験中，注意を与えるときは，先生はベルを鳴らすのです。すると子どもたちは，はじかれたように前を向きます。条件反射なんです。ベルの音で犬がよだれを流すと同じで！」

このような教師は，ごく少数と思う。が，教室内で笛を吹いて低学年の子どもたちを動かす教師がいることもまた事実である。

掃除をする時は黙動を強いられ，チャイムの音でその場に直立不動の姿勢をとらされ，授業中，笛の合図で操作される子ら。

「感覚器官から入った刺激が大脳を通過しないでじかに運動神経に伝わって，手足が反射的に動きだす。そういう神経の状態をつくりだすことがファシストたちの仕事の手はじめである」

と警告したのは，数学者の遠山啓であった。

一方，すぐれた授業は芸術家の創造的な仕事に等しいということを強調したのは，つねに実践の事実にもとづいて教育を論じ，授業の理論化をはかった斎藤喜博であった。

「よい授業には，すぐれた芸術作品と同じような緊張と集中がある。(中略)そういう授業は，一時間の授業の仕方が独創的であり，演出的であり，また，芸術と同じような感動をよびおこすのであり，子どもはもちろん，参観者をもその学級の学習のなかにとけこませ，いっしょに笑ったり，緊張したり，感動したり，新しいものを見いださせたりしながら，それぞれの心を新しく変革していくようにするものである。」

すぐれた芸術家の仕事から私たちが学ぶことは多いけれど，私の場合，心のアンテナの微調整には，山田洋次監督が撮り続けている「男はつらいよ」という映画を利用している。ちなみにこの映画は，1990年現在，42作を重ねている。

ところで，山田には『映画をつくる』(国民文庫)という素敵な本がある。この本は題名どおり映画論であるが，読者の多くは，教師の仕事や授業づくりに読みかえがきくということに気づかれるであろう。

例えば，モチーフについて。

「作品をつくるうえでもっとも大切なことは，一言でいえばどうしてもそれをつくりたいという気持のようなものだ」という指摘は，「作品」を「授業」に，「つくりたい」を「教えたい」に変えれば，授業づくりのポイントを教えてくれる。

また，演出家の責任について書かれた文章では，「監督」を「教師」に，「俳優」を「子ども」に読みかえれば，教師の仕事に関する話になる。

「自信をもたねば俳優は進歩しない。そこで監督は懸命になって，その俳優の美点・長所・魅力を発見することに努めるのです。それではどうしても魅力のない俳優はどうなるかと問われれば，そんな俳優はいないと答えるしかない。(中略)ただ，まったく魅力のない俳優，絶対俳優には向かない，といった人もたまにはいる。それは自分がうまい役者だと思いこんでいる人です」

このように氏は，やさしい語り口で映画論を展開する一方，その映画づくりを通して，現代日本の当面する教育問題について明確な主張を端的に伝え，解決のための見通しを持とうとしてい

る。『寅さんの教育論』（岩波ブックレット）には，学校教育の矛盾の指摘や，家庭教育のあり方への言及もある。

山田洋次の演出論に学んで教師も，子ども自身にも気づかない宝を宝として見い出す力が備わっていなければならない。難点をでなく，いいところを見い出し，その指摘によって，その素性が現実に開花するような働きかけが大切なのである。

多忙で心をすりへらしている教師にこそ，映画や演劇の鑑賞をすすめたい。

(3) 未来の教師のリポートと山田洋次さんからの手紙

授業づくりのヒントが与えられ，すぐれた教師論に読みかえのきく本を，テキストにしない手はない。そう考えて「健康教育論」の授業では，この本を学生とともに読んだ。資料1および資料2は，そのときのリポートの一部である。たのしい学びの成果を報告したところ，思いがけず山田監督から丁重な，未来の教師を励ます手紙が届けられた。

*

拝啓

このたびは突然，大勢の若い人たちからの手紙をいただいて大変びっくりしました。しかもそのひとつひとつが心のこもった嬉しいお便りで，とてもありがたく思ってます。

私の拙い著作が，素晴しい先生の手にかかるとこういうことになるのか，とただただ恐縮するばかりです。なにか，貧しいシナリオが，秀れた演出家の手にかかるとちゃんとした作品になってゆくケースを思い出したりしています。

この四月から教壇に立つ，ういういしい皆さんの緊張ぶりが，文面から伝わってきます。創る，ということが私たちにとっての喜びであるように，学ぶ，ということは子どもたちの喜びであるはずです。でも，今日の学校教育にあっては，どちらかと云えば喜びより苦痛であることの方が多いように思えてなりません。山本さんの教え子たちがこれから経験するであろう沢山の苦難を思うと，声を大きくして励ましの言葉を送りたくなります。

山本さん，浜松さん，河井さん，河上さん，そして橋田さんに，くれぐれもお手紙のお礼と，厳しい時代に船出してゆかれることへのお祝いの言葉と，声援をお伝え下さい。

時たま松山には出かけることがあります。今度ゆく時は，是非お逢いしたいものですね。

以上，簡単ですがお便りのお礼まで，認めました。どうぞお身体を大切に，よき教え子たちを育てられることを祈っております。

(1982年) 2月23日

山田　洋次

山本　万喜雄 様。

*

その誠実さ，そのあたたかさ。一通の手紙が，こんなにも感動を与えるものか。仲間たちは心の底から喜びあった。

創造集団「山田組」

供給：河上

"大勢の人間が心を合わせて
ひとつのものをつくっていく"

映画をつくるという仕事は、気のあった者同士で旅行するようなものだ

▶スタッフや俳優たちが船で旅をしているとすれば監督は舵取りです。「男はつらいよ」号でいうなら、私が舵取りで船の舳先には渥美清さんが立って威勢よく音頭をとっているのです。

監督は多勢のスタッフの舵をとっていく、つまりチームワークを指導することで映画をつくり出す

▶それぞれの人の考え方で、まず好きなように演じてもらい、その表現の中で間違った部分、嘘の部分を指摘しながらだんだん正確な表現を獲得するように指導していったわけです。

▶監督はYESとNO、あるいはOKかNG、このふたつの言葉をもっていればいい。そして数かぎりないOKあるいはNGをくりかえしながら、終局的にはその監督の個性的な表現としての作品ができあがってゆく、ということになるのです。

大勢の裏方たちがそのむさくるしい風采とはうらはらにこまやかに気をくばり、優しい思いやりを抱きながら監督の"夢路"を追うのが映画という芸術なのだ　（「作品集⑧」）

〈撮影の高羽哲夫〉「山田監督の三本目の作品『馬鹿まるだし』(1964)は、キャメラマンの私の第一作である。これ以後の山田作品の撮影は全部私が担当している。……私にとっては生みの親でもあり育ての親でもある。（「作品集㊃」解説）

〈佐藤蛾次郎〉「俺、結婚式あげてなかった。そうしたら『寅次郎夢枕』(1972)の時かな、可哀相だからってんで監督が女房を花嫁さん役に使ってくれて、一緒に記念写真とったの。前代未聞だよね、セットで結婚式やったってのは。仲人もやってもらったし、監督はやはり恩師ですね。」（「男はつらいよの世界」）

▶私のスタッフは、仕事がはじまると、けっして生活的なぐちをこぼしたりしない。つまりそういうことには耐えて、気持ちのいい部分だけをスタジオにもちこんでくれます。

……「チームの人間関係というものは、できあがった映画にそのまま反映するものです。」……

「寅さんチーム」の人間模様

ダメ人間の復権

○ダメ人間のレッテルを貼られながらも、寅次郎は私より我々よりもはるかにすぐれた人間的心情をもっている。(「キネマ旬報」1982.1月号)

▶どんな人だってほんとうにやる気になれば素晴しい才能を発揮できるはずだし、また少々だめなスタッフの一人ぐらいはいたほうがチームワークのためにはむしろいいという場合もあります。

インテリ批判

○寅はそもそもインテリが嫌いなのだ。…… 寅にとってはインテリであることすなわち女にもてない＝女の気持ちがわからない＝人の心が理解できない、という図式になる。(「男はつらいよの世界」)

▶素晴しい技術をもったカメラマンがひとりいること、あるいは天才的な美術監督が参加していることは、むろん望ましいことではあるにしても、…… ひとりだけとびはなれて優秀な人がいたからといっていい映画ができるものではない。 (P167)

平凡さの輝き

○(さくらには)夫・博の低賃金と自分のささやかな内職でやりくりしながら、挫けないでがんばっている生活者としての存在感があふれる。シリーズがえんえんと続くなかで(これが)色あせるどころか、一層輝きを増しているというのは大変なことだ。(「男はつらいよの世界」)

〈倍賞千恵子〉「山田監督は、私の"無個性の個性"を上手にひき出して下さった。」(「若き実力者たち」)

……「…愛なくしてはもともと映画などつくれないのかもしれません。私の考えでは、人を愛するということはその人を大事に思うことで、人を大事にしようと思うことは同時に自分をも大事にしようと思うことです。」……完

資料2.

笑いと健康
——笑いは生きるエネルギー

♡なぜ笑いが必要なのか

"笑いは百薬の長""笑う門には福来たる"—— 笑いは生活にかかせないもの。

つらい、きびしい状況をのりこえて（＝笑いとばして）生きていく力に転換する。

仕事をより楽しく、
笑うことで疲れを解消

生活の息つぎ

観客が寅さんに求めるもの
そんなこと（現実のつらさ、厳しさ）はよくわかっているんだよ。お前にうたってもらいたい歌はもっと明るい歌なんだよ。俺たちを楽しく笑わしてくれることなんだよ。
（『映画をつくる』P40）

♡寅さんの笑いは、いかに作られるか

① 人間の真の姿を描く。（人間の真の姿→共通点→共感→笑い）

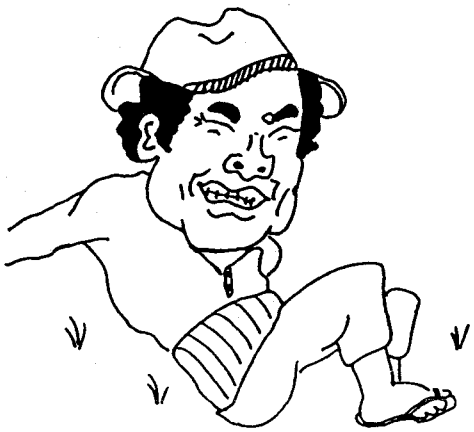
みんな初めからおかしい映画を作ろうと思っているわけじゃなく、人間を正確に描くということだけを考えて、その結果として笑いはあとからついてくる。

② 勤労民衆の立場に立って——真面目に生きる人がバカをみない。その大切さを伝える。

人間はひたいに汗して真面目に働かなければいけないし、その尊い労働が人間の文明を発展させてきたのだと誰でも信じている。しかし同時に、労働くらい嫌なものはない、できるなら、おもしろおかしく遊んで暮らしたい……。こんな二つのまったく矛盾した気持ちを持ちながら生きているのが庶民ではないのか。

↓

寅さんの行動との対比の中で、発見していく。



③ 人間への温かいまなざし
人間の存在の大切さ、人間の多面性を描く。

きまじめなさくら、ふまじめな寅さん
このふたりは、実は観客にとっては両方とも自分の分身
（『映画館がはねて』P.157）

さびしい話だからこそ、終りは明るく、一つ弾まなくては。
（落語のオチにヒント）
（目前書 P.65）

楽しい瞬間があるからこそ人間は生きていける。そんなことのまったくない生活の方が現実的でない。
↓ （『映画をつくる』P.92）
からりと晴れた青空に象徴！

♡笑いは人と人をつなぐもの
やはりみんなで笑うから楽しい。（『教育』'84.11 P.64）
映画は集団芸術。（『映画館がはねて』P.

文明というものは、人間同士がより深くコミュニケートするためにこそ発達すべきなのに、今日の日本の物質文明は、人間を孤独な殻の中に押し込めるようにのみ発展している。……（中略）……他人と仲良くなりたい、少しでも多くの人間と友人になりたいと考える人は、今日の競争社会では落ちこぼれ……
（『映画館がはねて』P.150, 151）

——うけとり方はさまざまでありながらも
みんなが共感してくれるような作品ができれば理想——
（『映画をつくる』P.79）

★笑い　その人の人格を映しだす。
笑う人が持っている生活感覚、認識、思考で変わってくる。

★いっしょに笑える笑い＝笑いの中に、人間生活の豊富で複雑な内容が含まれている。

笑うことで、自分の中に生きるエネルギーをたくわえつつ、まわりの人々との間に連帯感をつくりあげていく。
⇓
自分を大切に、他人を大切に、
そして、人間を大切にする気持ちを生みだす。

第三章　喜怒哀楽の教授法

1.　まきおの教授法

常々，むずかしいことをやさしく，やさしいことを深く，深いことをゆかいに，ゆかいなことを本気で，本気なことをゆっくりと，ゆっくりなことをすなおに，すなおなことに心をこめて，教えたいと願っている。

重いテーマを正攻法で挑んでいた私が，まわり道をしながらつかんだのが「やさしいことば　深い思想」に支えられた，喜怒哀楽の教授法であった。次に，その10か条を述べる。

① 人間讃歌の基本方向のなかで，闇の中の光を照らす。

人間の尊厳（ヒューマニズム）を基本的視座にして，きびしく（自己献身性），たしかに（科学性），おおらかに(楽天性)。山田洋次の映画づくりのように，「むごいほうの気持ばかり出てくるような時代だからこそ，いつもいいほうに光をあてていたい」。が，「これは現実をみないということではありません。自分の生きている社会の現実にたいする認識がどれだけ深く的確であるかということは大切な問題です」

② 日常感覚に根ざした現実認識を磨く。

軽やかに，重くなりすぎずに批判を重ねていく。たとえば，山田太一のドラマ「シャツの店」のセリフのように。

「目をちゃんと見て，月に一回おまえが好きだと言って下さい」

「月に一辺そういうことになれば，今までみたいにブスーと威張ってて，急にいうわけにはいかないでしょう。いう日が近づいてくれば，そういうことといってもそれほどおかしくないっていうように気持もっていかなくちゃならないでしょう。お父さんの態度，少しづつ変わってくると思うの」

このセリフを「君が代」「日の丸」問題に読みかえて，問題提起をする。このときのハッとする気持を大切にしたい。

③ 「学生に知識の小さな火花を与えるためには，教師は光の海全体を吸収しなければならない。」（スホムリンスキー）

教師の熱い思いをこめた要求を，さりげなく学生たちの中に投げかける。さざ波が立つ。そのさざ波が教室全体にひろがる。そしてできたら，さざ波はいつか大波となり，生徒一人ひとりにおそいかかる。対立が生まれ，論争がおこる。その論戦を乗り切って，学習集団は新しい地平に立つ。

教育相談にあっては，コロンボ刑事のように，さりげなく世間話をしながら，核心に迫る修業を積み重ねたい。

④ 教師自身の成長過程を示しつつ，同時代に生きる人間としてともに考える。

プロセス抜きの時代だからこそ，めんどうくささを生きる手応えに変えるプロセス文化を大事にしたい。

⑤ 地域の諸活動に参加する中で，人間的センスを磨く。

私の場合，月例の「朗読の会」に参加し，語り口を愉しんでいる。多様な職種の人々との交流は，何よりの栄養源となっている。

⑥ 文学作品を生かし，笑いの中で深く心に刻む。

詩人の小森香子，瀬野としの作品を愛誦している。たとえば，小森の作品〈味覚〉。

味　　覚　　小森　香子

なにが一番好き？　ときくと
都会でも　田舎でも　子どもらは
ハンバーグ　という
だからといって　母親が
とくにうまいハンバーグをつくるわけでもない
むしろ　手づくりのものより
ＣＭごさかんな冷凍食品を　うまいという

子どもの味覚は　舌ではなく
目と耳によって　やしなわれる
チョコレートは　極端に甘く
スナック菓子は　塩分過剰で
九歳で　糖尿病
十二歳で　高血圧

小児科のカルテは
うそのような　文字で　うずまる

（「日々のことば」[10] から）

その場にふさわしい話を選ぶことができれば，効果はバツグンである。

⑦　大胆な省略をし，あらかじめ知っていたことのワケを教える。

本質がわからなければ，省略は困難である。みんなが知っている話をする時は，深い知識，構成力が問われる。

⑧　論理性を育てる。

具体から入ると，実感しやすい。たとえば，拇指を使わないでミカンをむき，手指の対向性の話をする。が，原爆の怖さを知るために一発ということになれば，実感はできても，人類絶滅。どうしても論理性を育てなければならない。平和の中でこそ，人間的健康は存在する。

⑨　生活に役立つ内容もとり入れる。

「いろいろなことが　ここには書きつけてある
この中の　どれか　一つ二つは
すぐ今日　あなたの暮しに役立ち
せめて　どれか　もう一つか二つは
すぐには役に立たないように見えても
やがて　こころの底ふかく沈んで
いつか　あなたの暮し方を変えてしまう」
そんな花森安治の願いのように。

⑩　実践の総括，そして交流。

この16年。感想文をまとめた週刊の「授業通信」を発行してきた。一人ひとりを大事にしようとすれば，何と手間ひまのかかることか。しかし，誠実に，ていねいにそれを継続すれば，

お互いの信頼関係が深まることは間違いない。学生の文章を紹介したい。

2.　授業のリトマス紙――学生の感想から

書かない自由を保証した感想の用紙に，学生はどんどん素敵なことばを書く。

① 「対話形式を用い，学生全体に問いかけている。しかも事前に膨大な量の情報を消化しており，学生には極力負担をかけないようになっている。

つまり，一方的な問題提起ではなく，解答の有無の自由までを学生側に置き，ひたすら〝待つ〟態度をとる。しかも，いつ，どこからでも反応できるように，具象度の高い話の内に，極めて重要な言葉を入れている。

反応のある学生には新しい問いを，そうでない学生には能動的な〝待つ〟姿勢をとる。あくまで援助者の域を出ずに方向性を与えている。産婆法に似るところがあるように感じられる。」（充）

② 「山本の講義における『笑い』とは，重い講義を軽くみせかけるためのカモフラージュであり，学生を煙にまくためのわなだと思います。それは決して，みんなが笑える軽い笑いではなく，ある程度ブラックであったり，風刺的であったりして少しだけ考える笑いのように思われます。〝境界のない授業〟を行うためのクッションであり，境界を消していく役割をもっている。そのため重い話か軽い話かわからなくなり，学生たちはトラップにおちる。そして煙にまかれてさまよって出てくると，現実や真実という壁にぶち当ってしまう。そこでもう一度それをよじのぼるか，たたきこわすかということを考えさせる。『笑い』はただの『笑い』ではなく，計算されたキツイ笑いだと思う。」

③ 「いつも新鮮な話題，学生が興味を持つ話題を慎重に選んでおられたと思います。1つの講義の中で学生に伝えたいことをギリギリまでしぼり，学生が集中するように配慮した話，なるべくいつも笑いがあるように配慮した話の中で，それをどんな形で伝えるのが学生の印象に一番強く残るか，について，かなり苦心されていたのではないでしょうか。その過程の苦心がまるで学生に伝わってこないから，余計にそう思います。そのために映画，文学作品，時の話題等をうまく活用され，（それらを取捨選択するのにも，細心の注意を払っておられることでしょう。）その中から自分の健康の大切さ，自分をいとおしく思う心を，学生の胸に植えつけていかれました。教授する側とされる側という立場から見ると，教授する側は「親しみやすい」というイメージを崩さず，教授される側の心を一つでも多く開いて，心と心の交流をと苦心されていたように思います。もう一つ特筆すべきことは，よくあるような問題点だけを教えるという方法を先生が取られなかったことでしょう。「さくらんぼ坊や」や「恵那の教育」など，むしろ最高のレベルのすばらしいものを学生に示すことで，かえって現状の問題を明確にし，（光が強いほどできる影は強いのですから）問題を解決しようと努力している人々（＝仲間・先生）もいるんだという希望を示して，学生の心に呼びかけようとされていました。ただ，あまりに説得力がありすぎて，うなづいてばかりで，問題点を探そうとする学生が少ないように見えましたが，それが先生にも残念なことではないでしょうか。」（祥子）

④ 「身体の内にほとばしる情熱を，表面にはできるだけ抑えて静かに語りかけてくれる。時事問題を取り入れたユーモアは，私達に社会へと目を開かせるためのきっかけであり，思想を押しつけるのではなく，思想を感じさせてくれる。一見バラバラに見える事柄も，底に流れるメロディーは一貫しており，「いのちの尊厳」をテーマにした限りない人間賛歌である。先生は自ら

に対する最大の理解者であると同時に，最大の批判者であり，そこをつきぬけて，自分を肯定していく強さを持っている。私達にありのままの山本万喜雄という一個の人間を感じさせてくれる。先生自らが実践者であり，先生の生き様に教えられる。」（由紀子）

⑤「㋮やこしい話もわかりやすく，
㋮るでメリーポピンズのように，
㋮ーレツにファイトをもって，
㋮きには冗談をいいながら，
㋮っすぐに前にむかって，
㋮びしい心と清らかなハートを，
㋮しつけることなく私たちに伝えてくれた」

（ゆう子）

どんなに弱点をかかえていても，若者たちは捨てたものではない。総括文を読むと，いつも励まされる。

最後に，感想文に添えられた学生の詩を引用したい。

一歩ふみだせ　　真由美

まだまだ「輝き」へは遠い。しかし——
それは　あたりまえかもしれない。
何もアクティブしていないのだから。
悩むから成長する——いつかそう聞いた。
しかし　悩んでばかりいても
私達の時代は動かない。

一歩ふみだせと，今，私は自分に伝えたい。
4階までの階段をかろやかにかけ上がることや
朝　少し早くおきること——
そんな小さなことでいい。
自分を変えるためには　ほんの小さなことでいい。
昨日までの自分とちがう私に出会うために
今，一歩ふみだそう。

引用・参考文献

1) 拙稿「保健領域の指導」『講座日本の学力』第8巻，日本標準，1979年，p. 173
2) 門脇一生『高校生への手紙』地歴社，1979年，p. 209
3) 竹之下休蔵他『改訂中学保健体育』学研書籍，1971年，p. 221
4) 倉石五郎編『最新コンサイス独和辞典』1961年　p. 536
5) 丸山博「序文」M.K.ガンジー『ガンジーの健康論』編集工房ノア，1982年，p. 3
6) 住井すゑ・寿岳文章『時に聴く』人文書院，1989年，p. 180
7) 山田洋次『山田洋次作品集』（全8巻）立風書房，1979～80年
8) 吉村英夫『新・男はつらいよの世界』シネ・フロント社，1989年，p. 291～298
9) この項は，1985年2月7日付の「朝日新聞」の拙稿に手を加えたものである。
10) 小森香子「日々のことば」『花梨』，青磁社，1981年，p. 111